

一クラスの人数は何人が適当か



黒田成子

保育者養成の仕事に携っているわたしは毎年就職の時期になるとよく見かける光景がある。それは新しく卒業予定の学生たちが求人申込書の貼られた掲示板の前で話し合っていることである。まず、かならずと喋っている話題は一クラスの子どもの人数についてである。

「一クラス三八名とはひどい」「三才児で二五人なんて無理よ」

「でも正直に書いてあるとしたら良心的じゃない？」等々。

そして彼女たちが希望をもって就職のための見学に行ってみると、一クラス四〇名以上も子どもがいりすぎる。そして「あんなに人数が多くては……とても……保育になりません」といって他を探すことになる。

わたしは思わず苦笑する。なぜかという、学生たちはもっともらしいことをいっているが、彼女らはいったいどこでそうしたことを学びとったのだろう。当然他ならぬ私共の学校の教師養成

のあり方、講義や実習などの影響によるものであろう。しかし何名以上では多すぎ、何名以下では少ないというようなことを絶対条件としていききしてしまえるものか。（たとえばよくいわれている三才児は一五名、四才児は二〇〜二五名、五才児は約三〇名など）この与えられた機会にわたしももう少し考えてみたいと思う。

一、保育方針と人数

保育をするに当ってはそれを行なう者の考えがある。国で教育の目的とか指針を指示し、そして法的な枠はあるにしても、各々の幼稚園や保育所では何々のために、このように保育をするという方針があるはずである。

おなじように園則には「幼児の人格形成のために……」と記してあっても、それぞれの園ではねらいとするとところが少しずつ異なっている。たとえば、「ゆたかな情操を養う……」という表現

をある園では創作舞踊をさせてそこから子どもたちの情操を養うことと考えている。

ある園では勇氣という点におもきをおき、子どものグループ活動における人間関係のあり方に力をおいているかもしれない。また、ある園では情操というとまず宗教的なアプローチを考えるだろう。

それぞれの方針のもとに園児総数にも、クラスにおける人数にも相違が出てくるのは当然である。わたしのよく知っている幼稚園が二つある。

A園とB園はどちらも独自の考えをもって保育に当たっている進歩的な園である。しかし、その表われた形としてはA園は年長組一クラス一八名、B園は三五名でA園の二倍近い数である。全園児数もA園は七〇名余、B園は二〇〇名近い数で両園には大きい開きがある。

A園の主張はこうである。あくまでも子どもたちに幼稚園とはたのしいところであって、充実感と安定感のある所として印象づけたい。そういう土台に根ざして、先生と子ども同士の間で暖かいつながりができ、また、創造的、知的発達も芽ばえてくる。先生は個々の子どもと心の触れあいをもつためにクラスの人数は年長であっても二〇名を越えないようにしている。園の雰囲気は静かな落ちついたものである。

一方B園の園長はいわれる。人数が多ければ、子どもたちの間

に喧嘩もおこる。遊具の順番も待たなければならぬ。騒々しいこともある。しかし、こうした問題に集団の中で取り組んでいくうちに園児たちは忍耐、工夫、協調、勇氣を学びとっていく。七名ずつのグループを設け、輪番制のグループ・リーダーにグループをまとめる役目をさせている。二百名近い園生活は活気にみちている。

園によっては年少組にA園的、年長組にB園的配慮を、あるいはA、B園的考えと全く異なる考え方のところもあるだろう。一斉保育と自由保育の混合が行なわれている園ではそれぞれの方針によりどの程度の比重をおくかによって保育のあり方が変わってくる。

当然のこととはいいながら、それぞれの地域により、園の歴史や伝統により、教育観や児童観により方法が異なってくるのである。そして人数の問題も、保育方針如何によって変わってくる。

二、物的環境と人数

人数というと早速経営経理の面からそろばんをはじき出す向きもあるが、その問題はさておいて、物的環境との関係を考えてみたい。保育室の広さは人数と重要な関係にある。たとえば、かりに保育室が基準にはるかに及ばない部屋であれば、たとえ三〇人未満であっても子どもは自由な活動を阻まれてしまうだろう。

しかし、たとえ保育室は狭くとも、廊下やテラスがつづいていて、これを充分利用することができれば収容人数にも余裕が出て

くる。小さい保育室に整理棚や机や椅子がぎっしりつまっているのをよくみかける。若い先生が机と机の間を歩くすきまもなく、子どもたちの前に立って指示を与えるのが精いっぱいであったりする。製作などいわゆる机の上でしかできないような仕事が多い。先生の一斉的な指導に従って子どもはハサミで切ったり、糊で貼ったりする。騒がしくなれば紙芝居を見せて静かにさせる。たえず受け身の姿勢で学習をつづける子どもたちは一枚の絵を画くにしても、手洗に行くにしてもいちいち先生の許可を求めないと不安になる。こうした園が一九六七年の今日、今なお存在していて、しかもその数も夥しい。

一学級の人数が多いのは日本ばかりでなく、昨秋の「チャイルドフード・エデュケーション」によればアメリカにおいても一人の教師によって七十名、すなわち午前三五人、午後三五人を教えているところもあり、英国のロンドンにも大クラス保育が平然と行なわれている所があるということである。

日本は人口過剰であるから狭い保育室に大勢の子どもを収容するのは当然であるというのは暴論である。幼児時代にこそ可能な限りのよい環境を与えるべきであるし、このことの実現のために、努力がなされなければならない。まず、園でどういう子どもを理想像とするかということにつながってくるが、自分で考えて行動できる子どもにすることが目的であるならば保育室のあり方と人数のバランスに関してもっと工夫が必要である。

いったい整理棚や全員の机や椅子を保育室に四六時中おいておかなければ保育ができないものだろうか。クレヨンやハサミや帳面は各自のものをかならず持たせなければならぬのか。絵画製作はテーブルがなければ、リズムはピアノがなければできないものであるか。こういう固定概念によって不自由にされるのではなく、かりに一つの保育室と一定の人数の組み合わせがあるとするば、これをどのように活かしてつかうことができるだろうか。

たとえば時には床の上に坐って先生の話をきいたり、小さいグループに分かれてそれぞれの趣向を凝らした仕事やごっこ遊びに没頭させることもある——それも室内やテーブルの上に限らず廊下や庭までも延長する。そういった流動的な環境のつかい方がひいては子どもに自発性を促す保育になっていくのである。

そうすると設置基準では四十人まではよいからと、やたらに詰め込むのではなく、ある程度は人数をひかえた方がよいということになってくる。そしてさらに年齢による発達を考えると、けっきよくは三才児一五名、四才児二〇〜二五名……の一般的な結論に到達することになるかもしれない。

三、人数と教師

「一クラスの人数は何人が適当か」この問いに対してわたしは回答をもたない。むしろ保育方針はどうか、物的環境や保育方法、年齢発達はどうかなどの条件をつけてきた。それにもう一つ、教師という条件をつけた。すべてが未知の就職しはじめの先生

と、意欲があつて経験年数のある先生とでは指導力ばかりでなく、先生自身の安定感からして相違がある。就職しはじめに四〇人を受けもつなら、その新しい先生はまず子どもたちを十把ひとからげにしてひきまわすことで精いっぱいだろう。

わたしの願ひとしては若い教師があるグループの子どもたちと夢中になつて何かをやつていて——それは魚つりごっこでも工作でも何でもいいが——してなおかつ全体を見渡せるぐらいの人数が適當であると思う。つまり保育者が、子どもひとりひとりを生かすつ、保育者自身も生かされ、なお子どもたちの集団生活ができる程度の人数である。(諸条件によるから一概にはいえないが、少なくとも年長組であれば三十名以内であつてほしい)このようなことは理想主義ではなく、良心的な施設教育を存続させた意図があるならば、現実的に経営者の側にもっと配慮があつて当然ではないか。

四〇人以上でもすばらしい保育をしているベテランの先生方もある。しかし、わたしはできれば少数主義をとりたい。四〇名などというのは一般の教師の体力や能力についていえば、すでに限界を越えているものではないだろうか。

四、一対一の妙味

今日の日本の幼稚園、保育所ではいわゆる「教育ママ」ならぬ教育園長や教育先生が多くなつてきているようだ。意図された教育があまりにも幅をきかせている。(もちろん、最少限の基本的

なものへの意図すら無ければ問題にならないが。)

ここで意図されない教育に対して少し考えてみたい。米国のある神学者は「*language of relationship*」すなわち「関係の言語」ということをいつている。ものごとの本質的な意味が知られるためには、その言葉の背後にある事実が経験されなければならぬ。愛ということも教えるだけでは意味がない。0才から子どもをとり巻くところの大人たちの共同体が隣人のために真剣に問題に直面し、これを解決し、愛を体験としてくぐった時、子どもたちは「愛」という言葉を知る以前にその意味を知らう。そういう意味の言葉がわたしの印象に残っている。

このような言葉を引用するまでもなく、ここで指摘したいことは、集団の教育における子どもと子どもとの人間関係について盛んにとりあげられている今日ではあるが、それと同時に、あるいはそれに先だつて保育者と子どもとの関係をもっとこまやかなものとしてとりあげ、保育の中で育てていく必要があるということをしつと調したい。子どもを甘やかせるということとはちがつて保育者と子どもが一对一で心の触れあいをもつということである。

毎日の保育の中でこの一対一の妙味を味わっている教師がはたしてどれだけあるだろうか。これはときには意図されない保育であり、教師自身の問題でもあるわけである。

以上のような諸条件の上になつてわたしは一クラスの人数の問題を考えてみたいと思うのである。(東洋英和女学院短期大学)